

詩編通読



(3月30日)「詩編38:1~5」

わたしの肉にはまともなところもありません あなたが激しく憤られたからです。

(詩編38編4節)

・「病んでいる罪人の祈り」：個人的な嘆願です。病者によって用いられる、救いを求める祈りとなっています。表題にある「記念」とは、和解の献げ物の記念の分であるとか、葬儀のときに使われた用語ではないかと考えられています。

・タイトルに「病んでいる罪人」とあるように、詩編では病気と罪とが結び付けられることがあります。福音書の中にもそのような考え方をする人に対し、イエス様が否定したという物語がありました。(ヨハネ9:1~12)

・罪のために神さまがお怒りになるから、人は病気になるのだということを、イエス様が否定されました。しかしわたしたちの罪を、神さまは決して喜ばれていないだろうとも思います。その思いの中で、この詩編を読んでいきましょう。

(3月31日)「詩編38:6~9」

もう立てないほど打ち砕かれ 心は呻き、うなり声をあげるだけです。

(詩編38編9節)

・この詩編38編は、大斎節(レント)に読まれることの多い詩編です。大斎節には自らを振り返り、思いと言葉と行いによって罪を犯し続ける自分自身の姿と向き合います。自分の罪を認めることは、とても辛いことです。

・特に病に冒され苦しいときに、「それはお前が悪いことをしたからだ」と他人に言われたら、それはとても悲しいと思います。しかしイエス様の時代のユダヤ教では、そのような会話が当たり前になされていました。

・ただ病気は身体をむしばんでいきます。肉体だけでなく、心も痛めつけていきます。この詩編が伝えたいのはそれが自業自得だということではなく、そのときにこそ神さまに頼りなさいということなのでしょう。

(3月1日)「詩編28編」

主よ、あなたを呼び求めます。わたしの岩よ わたしに対して沈黙しないでください。あなたが黙しておられるなら わたしは墓に下る者とされてしまいます。

(詩編28編1節)

・「救いの祈願と感謝」：救いを求める祈りです。遠藤周作が書いた「沈黙」という小説があります。禁教令の中、宣教師やキチジローたちの信仰や心の動きを描いた作品です。二度映画化もされたので、ご存じの方も多いと思います。

・「神さまは黙して語ってくれない」、苦難に陥った時に、そのように思うことがあります。わたしの声に耳を傾けてください、救いをお与えくださいという切なる願いが、この詩編には込められています。

・聖歌128番「イエスキミイエスキミ み救いに」は、大斎節の曲の中にあつてとても明るさを感じさせる曲です。「主よ 主よ 聴きたまえ」という願いの中に「主は必ず聞いてくださる」という確信があるときに、わたしたちの祈りは神さまに届けられるのでしょう。

(3月 2日)「詩編 29 : 1~9」

主の御声は力をもって響き 主の御声は輝きをもって響く。

(詩編 29 編 4 節)

- ・「嵐における主の栄光」：賛美詩編です。この詩編は宇宙の主権者である神さまを賛美しています。最初に出てくる「神の子ら」とはイエス様のことを言っているのではなく、信心深い人たちのことを指しているのでしょう。
- ・3 節以降に「主の御声」という言葉が 7 回も出てきます。主の御声のすさまじさがここでは描かれます。その声は水の上に響き、力をもって響き、輝きをもって響きます。また地震を起こし、稲妻をも引き起こします。
- ・そのような大きな力を持つ主をほめたたえ、その栄光を主に帰すのです。わたしたちの日々の祈りの中でも、「み名を賛美します」、「み名をあがめます」といった、神さまの栄光に感謝する言葉を意識して用いるといいかもしれません。

(3月 3日)「詩編 29 : 10~11」

どうか主が民に力をお与えになるように。主が民を祝福して平和をお与えになるように。

(詩編 29 編 11 節)

- ・昨日の箇所では主の御声に圧倒されつつ、「どうか」と希望を祈っていました。聖歌 362 番「ガリラヤの海辺 山 緑に」という歌があります。あまり聞きなじみがないという方もおられるかもしれません。
- ・その 4 節に、「思い煩いに身を焼かれて 悩めるわれらに ずしきみ声を聞かせたまえ」という歌詞があります。すべてのものを造られた神さまの大いなる業をほめながら、そのみ声に安らぎを得させて欲しいと願うのです。
- ・神さまの栄光を賛美し、そのみ声の力が主の民であるわたしたちの心に平安を与えるように。そして「主の平和」がわたしたちの間にあるようにと願う。礼拝の「頌栄」のような祈りが、ここではなされているのです。

(3月 28日)「詩編 37 : 27~31」

主は正義を愛される。主の慈しみに生きる人を見捨てることなく とこしえに見守り 主に逆らう者の子孫を断たれる。

(詩編 37 編 28 節)

- ・「主は正義を愛される」という言葉が出てきます。ただ「正義」といっても、なかなか難しいものです。「自分が正しい」と思っているとしても本当にそうなのかわかりませんし、その思いを押し通そうとすると軋轢が生まれていくのも事実です。
- ・30 節に、「主に従う人は、口に知恵の言葉があり その舌は正義を語る」とあります。知恵は神さまから与えられるものです。自分の思いではなく神さまからの知恵に頼るときに、本当の正義は近づいてくるのかもしれない。
- ・神さまに対する信頼の中で、神さまの教えを心に抱くことが大切です。神さまの教えを知るために、聖書を読むことと日々祈ることを大事にしていきたいでしょう。そしてまっすぐに神さまを見上げて、歩んでいきましょう。

(3月 29日)「詩編 37 : 32~40」

主は彼を助け、逃れさせてくださる 主に逆らう者から逃れさせてくださる。主を避けどころとする人を、主は救ってくださる。

(詩編 37 編 40 節)

- ・詩編 37 編は、40 節で終わります。ヘブライ語のアルファベットは 22 文字ですから、「アルファベットによる詩」としては計算がありません。二つの節をまとめた 20 の段落の最初を、20 の文字で書いているようです。つまり 2 文字は使わなかったということです。
- ・「いろは歌」や「カルタ」においても、「ん」などどうやって使ったらいいのか悩む文字もあります。詩編でも教育が第一目標でしたので、細かいところは気にしなかったのかもしれませんが。
- ・そして最終の 39~40 節には、信仰を避けどころとすればよいという、大きな慰めが与えられます。そこに逃れた人を、主は救ってくれるのです。わたしたちが自ら戦い、勝利する必要はありません。

(3月 26日)「詩編 37 : 12~20」

しかし、主に逆らい敵対する者は必ず滅びる 献げ物の小羊が焼き尽くされて煙となるように。
(詩編 37 編 20 節)

- ・ここから主に従う人と主に逆らう人との、具体的な対決が書かれていきます。主に逆らう人は、たくらみ、牙をむき、剣を抜き、弓を引き絞ります。このような敵対関係にある相手を想像することは、わたしたちには難しいかもしれませぬ。
- ・しかし詩編の多くは、現実の敵の脅威にさらされている中で読まれていたことも、忘れてはなりません。そして今も、世界の各地で争いが起こり、どうしようもない状況の中で神さまにしか頼ることのできない人たちが大勢いるのです。
- ・そのような時に人々は、敵対者が神さまによって滅ぼされるのを願ってきました。しかしその思いが戦争へとつながっているという事実も否めません。献げ物の小羊が煙となるように敵対者になることを、心から願ってよいのでしょうか。

(3月 27日)「詩編 37 : 21~26」

人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらせていくさる。
(詩編 37 編 24 節)

- ・22 節に、「神の祝福を受けた人は地を継ぐ。神の呪いを受けた者は断たれる」という言葉があります。神さまから祝福されたイスラエルの人々には、約束の地が与えられるという希望がありました。
- ・ただそれは、イスラエルの人を一方向的に「正義」と見たときです。その土地に以前から住んでいる人にしたら、その希望は悪夢に変わってしまいます。さらに信仰の違いを、「主への反乱」だとされたら、たまったものではないでしょう。
- ・詩編を読むときも、世界の情勢をみるときも、どちらか一方に偏った見方ではなく客観的に見る習慣をつけていきたいものです。「神さまは悪人にも善人にも雨を降らせてくださる」ことを忘れてはなりません。

(3月 4日)「詩編 30 : 1~8」

主よ、あなたをあげめす。あなたは敵を喜ばせることなく わたしを引き上げてくださいました。
(詩編 30 編 2 節)

- ・「重病から救われた時の感謝の祈り」：感謝の祈りです。タイトルと内容を見ると、「わたし」という主語からもわかるように個人的な感謝に聞こえます。しかし「神殿奉獻の歌」という言葉が示す通り、これは共同体の祈りでもあるようです。
- ・わたしたちは祈りの中で、個人的なことを祈ることはあっても、「国家のため」に祈ることは少ないかもしれません。選挙の前などには祈ることもあるかもしれませんが、そのときも「為政者のため」ではなく特定の政党のために祈ってしまいがちです。
- ・イスラエルの人々はエルサレム神殿を焼かれ、捕囚としてバビロンに連れていかれました。国家を失い追い詰められた時に、神殿が再建されたのです。その「どん底」から救われた感謝と、個人の思いとを重ね合わせているのです。

(3月 5日)「詩編 30 : 9~13」

わたしが死んで墓に下ることに 何の益があるでしょう。塵があなたに感謝をささげ あなたのまことを告げ知らせるでしょうか。(詩編 30 編 10 節)

- ・キリスト教の中には、「証し」をととても大切にする教派があります。神さまに出会い、救われた喜びを、周りの人たちと分かち合うのです。また洗礼を受ける際に、「信仰告白」をみんなの前で語らせる教派もあります。
- ・わたしたち聖公会では、あまりそのようなことを積極的におこなっていません。しかし神さまに救われた喜びを隠すことなく言い表すことも必要です。ともし火を器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりしてはいけません(ルカ 8 : 16)。
- ・わたしたちの嘆きは踊りに変えられます。粗布は脱がされ、喜びは帯となります。「イエス様に出会えた喜びを伝えずにはいられない」、わたしたち一人ひとりがそのように変えられますように、お祈りしていきましょう。

(3月 6日)「詩編 31 : 1~9」

まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。

(詩編 31 編 6 節)

- ・「悩みの訴えと救いの感謝」：救いを求める個人の祈りです。「主よ、御手にわたしの霊をゆだねます」という言葉は、イエス様が十字架の上で語られたいわゆる“七聖語”の一つです。ルカ福音書 23 章 46 節に出ています。
- ・この言葉は神さまにすべて依存することを意味し、主の見守りの元に自らを置きます。近年いじめなどの問題が発覚した場合、学校を休むなど、とにかく「逃げなさい」とアドバイスされることが多いようです。「避難者」となることは、とても大事なことなのです。
- ・詩編 31 編の 6 節までは、就寝前の祈りの中でも用いられています。殉教者ステファノがこの言葉を引用した（使 7 : 59）ように、わたしたちも神さまにすべてをお任せすることを意識しながら、日々眠りにつきたいものです。

(3月 7日)「詩編 31 : 10~14」

主よ、憐れんでください わたしは苦しんでいます。目も、魂も、はらわたも 苦悩のゆえに衰えていきます。

(詩編 31 編 10 節)

- ・この箇所は「主よ、憐れんでください」という定式的な祈りからスタートし、自分自身の抱えている困難と、他者によってもたらされた困難とが語られています。わたしたち聖公会の聖餐式も、「主よ、憐れんでください」という言葉でスタートしていきます。
- ・しかし、「あれ？憐れんでくださいなんて、言ってたかしら？」と思う方もおられるかもしれません。実は、「キリエ エレイソン」という言葉が、「主よ、憐れみたまえ」という意味なのです。
- ・わたしたちは礼拝の中で、様々な困難にあっていることを告白します。内面的な問題も、外から受ける痛みもあるでしょう。それらのものを礼拝の最初にすべて神さまに打ち明ける。それがとても大切なことです。

(3月 24日)「詩編 36 : 6~13」

命の泉はあなたにあり あなたの光に、わたしたちは光を見る。

(詩編 36 編 10 節)

- ・6~7 節において、作者は神さまの偉大さを賛美します。わたしたち人間はときに、自分たちの造った建造物（東京スカイツリーやあべのハルカスなど）を見て、「すごいなあ」と感動します。
- ・しかし神さまが造られたあらゆる物の見事に比べたら、どうでしょうか。「命の泉はあなたにあり あなたの光に、わたしたちは光を見る」との言葉は、すべてのことを神さまに依存する、そのような信仰の告白です。
- ・そして 11 節以降には、願いが書かれていきます。わたしたちは何を土台として生きているのか。そして何に依存し、どのような希望を持っているのか。その上で、神さまに願い求めていくのです。

(3月 25日)「詩編 37 : 1~11」

沈黙して主に向かい、主を待ち焦がれよ。繁栄の道を行く者や 悪だくみをする者のことであら立つな。

(詩編 37 編 7 節)

- ・「義人と悪人の行く末」：牧会的な詩編です。教示的なアルファベット詩であり、悪人を打ち倒し義人に報いてくださる主への信頼と忍耐を教える詩となっています。不条理に対する疑問に答える形にもなっていると言えるでしょう。
- ・最初の 1~9 節は、かなり命令調になっています。「いら立つな」、「うらやむな」、「ゆだねよ」、「まかせよ」といった言葉が並びます。作者の周りには、もう我慢の限界だという人たちも多くいたのでしょう。
- ・その中で、「主に望みをおく人は、地を継ぐ」という言葉がでてきます。地とは約束の地を示していますが、希望を象徴的に表す言葉でもあります。その希望を確かなものとするために、わたしたちはどうあるべきかを教えるのです。

(3月 22日)「詩編 35 : 22~28」

わたしが正しいとされることを望む人々が 喜び歌い、喜び祝い 絶えることなく唱えますように「主をあがめよ 御自分の僕の平和を望む方を」と。

(詩編 35 編 27 節)

- ・詩編の中には、敵対者が取り除かれることが祈りの成就、つまり困難からの解決であると考えているものが多くあります。そのため、一方的な平和や正義に立ってしまうこともあるようです。
- ・世界には多くの争いがあります。どちらも自分の正義に立って、戦っています。でもそれは神さまの目から見たら、どちらも正しく、どちらも間違っているのかもしれませんが。どちらか一方のみを支持する人も、同じことです。
- ・「主の平和」が本当の意味で訪れますように。裁きや排除ではなく、そのことを祈ることができるように。そう願います。神さまの正しさによって、神さまのみ心がおこなわれるようにと祈りましょう。

(3月 23日)「詩編 36 : 1~5」

神に逆らう者に罪が語りかけるのが わたしの心の奥に聞こえる。彼の前に、神への恐れはない。

(詩編 36 編 2 節)

- ・「悪人の悪意、神の摂理」：個人的な救いを求める祈りです。この 5 節までの部分には、神さまに逆らう悪人の描写が書かれています。2 節の「罪が語りかける」という表現が心に刺さります。
- ・創世記の 4 章に、カインとアベルの物語が載せられています。カインは自分の供え物に主が目を留められなかったことに激しく怒り、顔を伏せました。そのときに主は、「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める (創 4 : 7)」と語りかけます。
- ・しかしカインは弟アベルを殺害してしまいます。罪が自分の中に入ってくることを、カインは止めることができなかったのです。わたしたちに罪が語りかけてきたときに、わたしたちはどう対処できるのでしょうか。

(3月 8日)「詩編 31 : 15~19」

わたしにふさわしいときに、御手をもって 追い迫る者、敵の手から助け出してください。

(詩編 31 編 16 節)

- ・16 節の「わたしにふさわしいときに」という言葉を読むと、「神のなされることは皆その時にかなって美しい」という聖書の箇所を思い起こします。これはコヘレトの言葉 3 章 11 節の言葉です。(引用は新改訳聖書の訳です)
- ・わたしたちは、「今すぐ」、「自分の思ったときに」、神さまに手を差し伸べて欲しいと願います。そして自分の思い通りにならないときに、「神さまはひどい」、「神さまなんていない」と叫んでしまうのです。
- ・しかし人にはそれぞれ、「神さまの時」があるのです。神さまに出会うとき、洗礼に導かれるとき、天に召される時、すべてその人に「ふさわしいとき」に、神さまはそのみ手を伸ばされるのです。

(3月 9日)「詩編 31 : 20~21」

御恵みはいかに豊かなことでしょう。あなたを畏れる人のためにそれを蓄え人の子らの目の前で あなたに身を寄せる人に、お与えになります。

(詩編 31 編 20 節)

- ・「やさしき息吹の くしき恵み おろかなわれをも 招き入れる」、聖歌 540 番の一節です。「Amazing grace (アメージンググレース)」と言った方が、よくご存じなのかもしれません。
- ・この曲の作詞をしたのはジョン・ニュートンという、兵士から奴隷商人を経て牧師となった人物です。彼は 22 歳の時、自分の乗った船が暴風のため難破しかけます。そのときに彼は母の死後初めて神さまに祈り、奇跡的に遭難を免れたことで回心したといわれています。
- ・そして作った歌が、「Amazing grace ! (驚くべき恵み!)」なのです。この詩編 31 編 20 節は、聖歌 540 番の元になっています。苦しみや試練の中にあっても、主のみ恵みを賛美する。そこに神さまに対する信頼があるのです。

(3月10日)「詩編31:22~25」

主の慈しみに生きる人はすべて、主を愛せよ。主は信仰ある人を守り 傲慢な者には厳しく報いられる。

(詩編31編24節)

・お葬式のときによく歌われる歌の中に、「わが主イエスよ ひたすら(聖歌496番)」という聖歌があります。全部で4節の歌詞の中に、14回も「愛」という言葉が出てくる歌です。今日の箇所の「主を愛せよ」という言葉に通じる聖歌です。

・この詩編31編は全体を通して、「祈りは必ず聞かれる」ことを確信して疑わない、模範的な祈りだと言われます。お葬式で歌う聖歌も、神さまにすべてをお任せする、信仰の歌が多く用いられているようです。

・「いまわ(臨終)の息かすかに 残るときも愛をば 増させたまえ主を愛する 愛をば 愛をば」という4節の歌詞を歌いながら、「神さまはわたしたちのことを決して見捨てはされない」という信仰を確かめるのです。

(3月11日)「詩編32:1~5」

わたしは罪をあなたに示し 咎を隠しませんでした。わたしは言いました「主にわたしの背きを告白しよう」と。そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを 赦してくださいました。

(詩編32編5節)

・「罪が赦された喜び」：悔い改めの詩編です。マスキールという言葉には「指揮」のほか、「教訓」という意味もあります。悔い改めの実践を教訓として教える、そのような詩だということでしょう。

・悔い改めで大切なことは、自分の罪や咎を隠すことなく、神さまの前にさらけ出すことです。神さまに何度も背いてきた自分を振り返り、そのことをきちんと告白することです。そのときに神さまは、手を伸ばされるのです。

・1節に、「背きを赦され、罪を覆っていただいた者」と書かれています。神さまは罪深いわたしたちを、そのままの姿で受け入れてくださいます。白い衣をかぶせるように、わたしたちを覆い、包み込んでくださるのです。

(3月20日)「詩編35:7~17」

わたしの骨はことごとく叫びます。「主よ、あなたに並ぶものはありません。貧しい人を強い者から 貧しく乏しい人を搾取する者から 助け出してくださいませ。」

(詩編35編10節)

・昨日に続いて今日の箇所も、作者は敵対者が貶められるようにと祈ります。作者は敵対者が病気になっていたときに、断食し、祈り、嘆いていました。ところが作者が病気になったときには、敵対者は喜んだそうです。

・誰かのために祈っていても、その気持ちがきちんと伝わらなかったり、また裏切られたりすることはよくあります。「どうして分かってくれないんだろうか」と悲しくなることもあります。

・敵対者を毒麦とするならば、「神さま、すぐにこの毒麦を抜いてしまってください」と作者は叫んでいるのです。しかしイエス様は言われました。「毒麦も、育つままにしておきなさい」と。すべてのことを神さまにお委ねするのです。

(3月21日)「詩編35:18~21」

わたしに向かえば、大口を開けて嘲笑い「この目で見た」と言います。

(詩編35編21節)

・「優れた会衆」や「偉大な民」というのは、どのような人たちの集まりでしょう。この言葉の中に、ユダヤの人たちの「選民意識」を感じてしまうのは、わたしの考えすぎでしょうか。

・「無実なわたしを」と主に向かって堂々ということが、果たして人間に可能なのでしょうか。イスラエルの王ダビデも、サムエル記下11章にあるようにウリヤの妻バト・シェバのことで大きな罪を犯しました。

・「この目で見た」という言葉は、「そら、そら、それ見たことか!」という嘲笑の言葉だそうです。この「敵対者」と呼ばれる人たちは、もしかしたら作者の心の中をよく知っているのかもしれませんが。

(3月18日)「詩編34:16~23」

主はその僕の魂を贖ってください。主を避けどころとする人は 罪に定められることがない。

(詩編34編23節)

- ・20節に「主に従う人には災いが重なる」と書かれています。いくら善い行いを重ねていても、いつも幸せであることはありません。それどころか従うことによって、多くの困難が降りかかってくるようにも思います。
- ・わたしたちは知らず知らずのうちに、祈りや献金によってどれだけ「ご利益」があったかと、計算してしまうこともあるかもしれません。しかし神さまをそのように測ることは、果たして正しいことなのでしょうか。
- ・「主はそのすべてから救い出し 骨の一本も損なわれることのないように彼を守ってください」、これがこの詩の一番伝えたかったことです。神さまは愛のお方です。わたしたちを決して見捨てはしない。そのことを心から信じていきたいものです。

(3月19日)「詩編35:1~6」

わたしに追い迫る者の前に 槍を構えて立ちふさがってください。どうか、わたしの魂に言ってください 「お前を救おう」と。

(詩編35編3節)

- ・「不当に訴えられた者の祈り」：個人的な救いを求める祈りです。この詩の中で作者は、武装した敵からの救いを求めています。主に対して、「戦ってください」、「助けてください」、「立ちふさがってください」と願うのです。
- ・わたしたちは祈りの中で、「あの邪魔な人の存在を消してください」とは祈らないと思います。しかし個人的な救いを求めるがあまり、どこかで「敵」を排除したいという気持ちが出て来るかもしれません。
- ・イエス様は敵のためにも祈りなさいと命じられました。そしてご自分は十字架の上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈られました。このイエス様の姿を、わたしたちは忘れてはならないと思います。

(3月12日)「詩編32:6~11」

わたしはあなたを目覚めさせ 行くべき道を教えよう。あなたの上に目を注ぎ、勦めを与えよう。

(詩編32編8節)

- ・悔い改めて罪の告白をした者が赦されるとき、そこには何が待っているのでしょうか。わたしたちが神さまを見失い、自分勝手に歩いている姿を聖書では、「目の見えない」と表現することがあります。
- ・どこに行けばよいかわからず、ただやみくもに歩き回っている状態。それどころか一歩も動くことができずに、うずくまっている状況。その「目の見えない」わたしたちを目覚めさせ、行くべき道を教えて下さるのが神さまです。
- ・赦しによって、わたしたちと神さまとの関係は回復します。そのことを知ったときに、わたしたちは喜びの声をあげることが許されるのです。これが神さまの約束された導きなのです。

(3月13日)「詩編33:1~11」

主に従う人よ、主によって喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい。

(詩編33編1節)

- ・「創造主の摂理の賛歌」：ほめ讃える賛美詩編です。「主に従う人よ、主によって喜び歌え」という言葉を聞くと、聖歌457番「主に従い行くは」を思い出すという方もおられるのではないのでしょうか。
- ・主に従い行くことは、どんなに喜ばしきことでしょうか、どんなに幸いなことでしょうか、どんなに心強いことでしょうか、と歌うこの聖歌は、主こそ信頼と希望を置くことができるお方だと歌う詩編33編と共鳴するようです。
- ・「十弦の琴を奏でて」とあるように、この詩編は神さまをほめ讃えるために多くの人たちによって歌われてきました。「み跡を踏みつつ 共に進まん み跡を踏みつつ 歌いて進まん」とわたしたちも賛美しましょう。

(3月14日)「詩編33:12~15」

人の心をすべて造られた主は 彼らの業をことごとく見分けられる。

(詩編33編15節)

- ・昨日の箇所の後半から、作者は主を様々な形で賛美します。まず天地を造り、支配される方として。次に国々と諸国の民の神として。そして今日の箇所では人を治める神としてあがめていきます。
- ・今日の箇所に、「人の子らをひとりひとり御覧になり」、「地に住むすべての人に目を留められる」と書かれています。イエス様がペトロたち漁師を弟子として招いたとき、イエス様は彼らを「御覧になった」そうです。
- ・神さまのみ心は、わたしたち一人ひとりの心に向けられているのです。神さまは決して遠い存在ではありません。わたしたちのすぐそばにいて、わたしたちに目を向けられる方だということを、心に留めたいと思います。

(3月15日)「詩編33:16~22」

王の勝利は兵の数によらず 勇士を救うのも力の強さではない。

(詩編33編16節)

- ・わたしたちはしばしば、世俗的な価値観や人間的なものに頼ってしまうことがあります。お金や地位、財産などなど。それらの物に頼るのは、兵や馬の数に頼って勝利を願うことと変わらないのかもしれませんが。
- ・この詩編33編は、主に従うことの喜びからスタートしました。主は救いの神さまであるから、魂を死から救い、飢えから救い、命を得させてくれるのだという信仰(信頼)の中で、わたしたちは歩んでいくのです。
- ・「心の空晴れて 光は輝るよ」、「悪しき思い消えて 心は澄むよ」、「恐れのかげ消えて 力は増すよ」と聖歌457番で歌うように、神さまがわたしたちに希望を与えて下さるようにと祈っていきましょう。

(3月16日)「詩編34:1~8」

わたしは主に求め 主は答えてくださった。脅かすものから常に救い出してくださいました。

(詩編34編5節)

- ・「救われた者の感謝と教え」：個人的な救いへの感謝です。この詩はアルファベットによる詩です。つまりいろは歌のような教示的内容になっています。また表題には詳しく、詩が読まれたときの状況が書かれています。
- ・「ダビデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに」と書かれています。これはサムエル記上21章11~16節の記述が元になっています。ただしダビデが恐れたのはアビメレクではなく、ガトの王アキシシュですが。
- ・主に頼るしかないその状況を、詩編では「貧しい人」と表現します。自分の力で歩むことができないことを知ったときに、本当の意味で主にすべてを委ねることができるのです。このことを覚えながら、聖歌571番を歌ってみてもいいかもしれません。

(3月17日)「詩編34:9~15」

味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。

(詩編34編9節)

- ・9節の「味わい、見よ」とは、あなたも経験してみなさいという意味だそうです。わたしたちが主の恵みの深さを知るのは、どのようなときでしょうか。一つは聖餐式ではないかと思います。
- ・聖餐式の聖歌に、「カルバリの木にかかり(251番)」というものがあります。イエス様の十字架を覚えながら、そのことによってわたしたちに与えられた喜びの食卓を囲み、共に祝いましょうという歌です。
- ・その4節はこのような歌詞です。「いつくしみ深き主よ み座近くわれを召し とこしえに待ち望む 命の糧与えて 悪を捨て喜びて つねに主におらしめよ」。主の食卓を囲むとき、わたしたちは神さまの恵みのシャワーを浴びるのです。